

① 申請者	館林市	② タイプ	地域型 / シリアル型 A B C D E
③ タイトル			
(ふりがな)	さとぬま —いのり・みのり・まもりのぬまがみがきあげた たてばやしの ぬまべぶんか—		
里沼(SATO-NUMA) —「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化—			
④ ストーリーの概要 (200字程度)			
関東の山々が一望できる館林では、今も多くの沼と出会うことができる。館林の沼は人里近くにあり、「里山」と同様に人々の暮らしと深く結び付き、人が沼辺を活かすことで良好な環境が保たれ、文化が育まれてきた「里沼(SATO-NUMA)」であった。館林の里沼は、沼ごとに特性が異なる。その歴史を紐解くと、里沼の原風景と信仰が共存する茂林寺沼は「祈りの沼」、沼の恵みが暮らしを支えた多々良沼は「実りの沼」、館林城とつつじの名勝地を守ってきた城沼は「守りの沼」と言い換えることができる。館林の里沼を辿れば、それぞれの沼によって磨き上げられた館林の沼辺文化を味わい、体感することができる。			
 茂林寺沼及び低地湿原  多々良沼越しに望む富士山  城沼とつつじの名勝地「躑躅ヶ岡」  創業期日清製粉館林工場事務所  旧秋元別邸  鯉の天ぷら・うどん			

市町村の位置図（地図等）



群馬県館林市へのアクセス



電車でのアクセス



▶東武伊勢崎線にて、
浅草から特急で約60分
伊勢崎から約60分

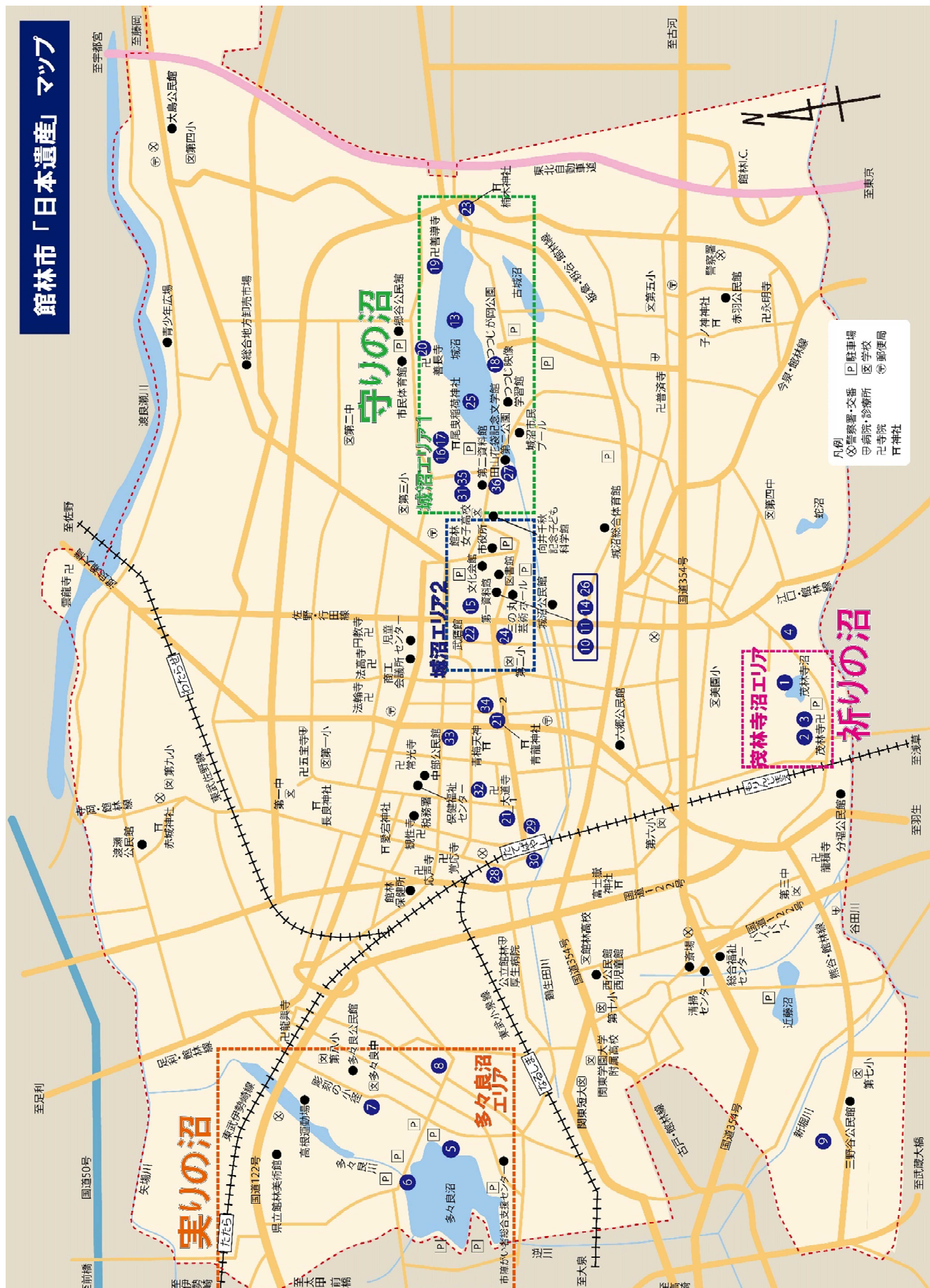
Tobu Isesaki Line:
About 60 minutes by express train from Asakusa Station
About 60 minutes from Isesaki Station
搭乘東武伊勢崎線
由浅草搭乘特急列車約60分鐘
由伊勢崎站約60分鐘



お車でのアクセス



構成文化財の位置図（地図等）



全体図中に印の無い 12・37・38 は市内飲食店でお召し上がりください

茂林寺沼エリア＝「祈りの沼」



多々良沼エリア＝「実りの沼」



城沼エリア1 = 「守りの沼」



城沼エリア2 = 「守りの沼」



ストーリー

里沼(SATO-NUMA) —「祈り」「実り」「守り」の沼が磨き上げた館林の沼辺文化—

【里沼】沼は、古代・万葉の頃には「隠沼」と詠われ、水辺の草木に囲まれてひっそりとした佇まいを持ち、人を寄せつけない神聖な場であった。いつしか、人々が沼に近づき集う中で、暮らしと結びつき、沼と共生した生業や文化が生まれ、沼は「里沼」となった。

里沼は、自然と暮らしが調和した生活文化を今に伝える、我が国の貴重な財産である。新田開発や近代化の波にもまれ、各地から沼が消え去りつつある今、館林では、時を重ねながら、それぞれの特性を磨いてきた、希少な里沼を見ることができる。



館林の地形と沼

①里沼(SATO-NUMA)

❖館林では、冬の朝夕に白鳥たちが沼から沼へと雁行する光景を目にすることができる。大小の河川が網目のように広がる関東平野には、かつて多くの沼が存在したが、近世以降のさまざまな開発によってほとんどが姿を消し、耕地や工場用地、宅地などに変わった。しかし、館林には茂林寺沼・多々良沼・城沼をはじめ、近藤沼・蛇沼など今も大小の沼が存在し、沼辺を行き交う水鳥たちの良い棲みかとなっている。

❖利根川と渡良瀬川に挟まれた館林の地形は、標高20mを境に低地と台地からなる。台地に入り組んだ谷から自然に湧き出た水は低地で滞留し、堰き止められて多くの沼が生まれた。その沼の畔に人の手が加わることで、館林の「里沼」の歴史が始まった。



白鳥の雁行風景(城沼)



茂林寺の山門



茂林寺に伝わる茶釜



多々良沼と松林



大谷休泊の墓

②「祈りの沼」～里沼の原風景を残す茂林寺沼～



❖かつて、河川や沼の水辺には湿地や湿原が広がり、その周りには平地林が見られた。沼や湿原には、鯉や鮒、トンボなどの水生動物や昆虫、菱や藻などの水草や湿原の植物が生息し、沼辺の平地林は狸や蛇、野鳥などの棲みかとなっていた。このような水を取りまく自然環境は、平野の都市部では開発によってほとんど見られなくなっている。しかし、周辺が宅地化された今も、茂林寺沼にはその原風景が残されている。沼辺にはコウホネ、カキツバタ、ノウルシなど希少種の植物が自生し、関東地方でも数少ない貴重な低地湿原となっている。

❖茂林寺沼には、なぜ今も原風景が残っているのか？そこには、600年前に開山した古刹・茂林寺の存在がある。沼の畔に曹洞宗の信仰の拠点「祈りの場」が生まれることにより、人々の自然を畏怖する気持ちが高まり、「祈りの沼」としての静謐さが受け継がれてきた。いつしか人々は、その沼を茂林寺沼と呼ぶようになった。そして、寺に伝わる貉(狸)の古譚「ぶんぶく茶釜」のなかで、和尚が貉の化身であったり、狸が茶釜に化けるなど、人と動物とのかかわりが今もユーモラスに語り継がれている。

❖茅葺き屋根の本堂や山門をもつ茂林寺は、その葺き替えに沼茅(葦)を利用してきた。人々は繁茂する葦を刈ることで沼の生態系を維持し、茂林寺沼は「里沼」として人との共生が保たれてきた。今も人々の祈りの姿が途絶えることのない寺と、希少な動植物の棲みかの沼との共存が図られている。

③「実りの沼」～“麦都”館林を支えた多々良沼～



❖多々良沼とその沼辺に細長く連なる松林。そこには「たたら」の地名の由来となった古い時代の製鉄の痕跡と、500年前の開拓者大谷休泊による植林と用水堀開削の歴史が刻まれている。多々良沼は、人々の暮らしを支え

る生業の場としての「里沼」へと拓かれてきた。

- ◆沼からの用水によって潤された田畑は、米と麦との二毛作が可能となり、江戸時代には館林藩から将軍家へ小麦粉が献上されたように、館林は麦の産地となった。明治期になると麦を生かした近代製粉業や醸造業が興り、「麦都」となった館林では、麦を原料とした麦落雁やうどん、醤油が名産品となった。「里沼」による水と大地の恵みは、多々良沼を「実りの沼」へと進化させ、現代の館林の食品産業の興隆へと結実している。
- ◆「実りの沼」は漁労の場としても人々の暮らしを支え、鯰の天ぷらや鯉の洗い、鮎の甘露煮など沼の幸を活かした個性ある食文化をもたらした。長年培われてきた様々な味わいは、里人たちの貴重なたんぱく源となり、もてなしや晴れの日々の料理として今も暮らしに根付いている。

④「守りの沼」～城と躑躅ヶ崎を守ってきた城沼～

- ◆550年前、周囲5kmの東西に細長い城沼を天然の要害として館林城が築かれた。城沼は館林城の建つ台地を取り囲む外堀の役目をし、武将たちにとって「守りの沼」となった。沼によって守られた堅固な城は、近世になると江戸を守護する要衝として、徳川四天王の榊原康政や、五代将軍となる徳川綱吉の城となり、守りを固めるための城下町を広げ、その周囲に水を引き入れ、堀と土塁で囲った。
- ◆「守りの沼」には、二つの伝説が生まれた。一つは龍神伝説である。沼に人を寄せつけないため、城沼は沼の主・龍神の棲む場となり、城下町にはその伝説を伝える井戸が残る。もう一つはつつじ伝説である。今から400年程前、「お辻」という名の女人が龍神に見初められ、城沼に入水した。それを悲しんだ里人は沼が見える高台につつじを植え、その地を「躑躅ヶ崎」と呼んだ。歴代の館林城主はそこにつつじを植え続け、花が咲き誇るようになった高台を築山に、城沼を池に見立てた雄大な回遊式の名庭園を造り上げた。城主によって守られてきた躑躅ヶ崎は「花山」とも呼ばれ、花の季節には里人たちにも開放された。
- ◆明治維新後の近代化は、「守りの沼」を大きく変貌させた。江戸時代に禁漁区となって人を寄せつかなかった城沼は、里人たちに開放されて漁労や墾田、渡船などが営まれ、「里沼」としての歴史を歩み始めた。

⑤「もてなしの心」へと磨き上げられた館林の沼辺文化

- ◆近代化による「守りの沼」の変貌は、城沼と景観を一つにしていた「躑躅ヶ崎」も大きく変えた。それまで城主によって守られていた「躑躅ヶ崎」は、町人や村人たちの努力によって、公園「つつじが岡」として行楽地に生まれ変わり、400年前に植えられたつつじは貴重な古木群となり、名勝として甦った。多くの人々が訪れるようになった沼辺には、行楽客を迎えるための文化が集約され、「もてなしの心」が芽生えた。
- ◆近代化によって城下町で成長した製粉・醤油醸造・織物などの会社は、内外の客を迎えるもてなしの場として「つつじが岡」を利用した。東武鉄道の開通と館林出身の文豪田山花袋が記した旅の案内書は、沼辺にある「つつじが岡」と茂林寺へと多くの人々を誘った。さらに「実りの沼」がもたらした名産品の麦落雁やうどんは、手軽な館林土産として広く知られるようになり、里沼の特性を活かした「もてなしの心」が根付いた。
- ◆館林の沼辺に佇むと、赤城山や日光連山、遠くは筑波山・富士山を眺望できる。「祈りの沼」「実りの沼」「守りの沼」、それぞれ特性を持って、多彩な文化を生み出してきた館林の「里沼(SATO-NUMA)」。その特性は明治の近代化以降、「もてなしの心」へと磨き上げられ、館林の沼辺文化として今も受け継がれている。



沼の幸・川魚料理



館林城三の丸土橋門



つつじ古木群



龍神伝説の竜の井



渡し舟が起源 花ハスクルーズ



正田醤油正田記念館



旧館林二業見番組合事務所



田山花袋旧居

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	文化財の名称 (※1)	指定等の状況 (※2)	ストーリーの中の位置づけ (※3)	文化財の 所在地 (※4)
①	茂林寺沼及び低地湿原	県天然記念物	館林市の南部にある周囲約 1 kmの沼とその周囲に広がる低地湿原。なかでも低地湿原は関東平野に残る数少ないもので、今も自然環境を良好に残す。希少種のコウホネやカキツバタなどの水生・湿原植物、トンボなど湿原の貴重な動物が生息し、古刹・茂林寺とともに「祈りの沼」の景観を醸し出している。	
②	茂林寺(分福茶釜)	未指定 (建造物)	応永33 年(1426)、茂林寺沼の畔に「祈りの場」として開山した寺院。江戸時代の茅葺屋根の本堂と山門があり、茅は茂林寺沼の葦が使用されてきた。貉(狸)の化身である守鶴がもたらしたという茶釜「分福茶釜」が伝わり、明治時代の巖谷小波の童話で全国に知られるようになった。山門前には狸像が並び、境内には童話を伝える巖谷小波の詩碑がある。	茂林寺
③	茂林寺のラカンマキ	県天然記念物 (植物)	茂林寺の本堂前にある樹齢約 600 年、樹高 14m の巨木。茂林寺の開山とともに、刃先が尖っているため魔除けとして植えられ、「祈りの場」となった歴史を伝える。	茂林寺
④	堀工町のどんと焼き	未指定 (年中行事)	江戸時代から続く行事で、茂林寺沼近くにある熊野神社の神事として行われていた。現在は地区の行事として、毎年 1 月 15 日に近い日曜日に、古いお札やだるまなどを焚いて、1 年間の無病息災を祈る。お焚き上げのヤグラは、茂林寺沼で刈った葦やナスガラなどを積み上げて作られる。	堀工町 ふれあい 広場
⑤	多々良沼	未指定 (名勝地)	館林市の西北部にある周囲約 7 kmの沼で、平安時代に行われた蹈鞴(たたら)製鉄から名付けられたという。中世の開拓者大谷休泊により多々良沼から用水が開削され、その水で潤された台地では米麦の二毛作が盛んとなり、肥沃な穀倉地帯を育んだ。この「実りの沼」からとれる鯉や鮒、鯰や鰻などは、里人の貴重なたんばく源となった。	
⑥	多々良遺跡(カナクソ)	未指定 (遺跡)	多々良沼北岸にある遺跡で製鉄生産址と伝わる。現在の日向漁港の沼辺では、冬に水位が下がると、「カナクソ(金糞)」と呼ばれる製鉄の時に出土された鉾滓を見つることができる。	野鳥 観察棟

⑦	ないりくこ ききゅう 内陸古砂丘	未指定 (地質鉱物)	利根川が形成した自然堤防の砂層で、館林市南西部から多々良沼東岸まで続く。砂鉄を豊富に含み、多々良沼の伝説につながる製鉄時の砂鉄や薪などの資源供給地点となった。古砂丘斜面の松沼町遺跡からは古代の炭焼窯跡が発見された。	
⑧	おお や きゅうはく はか 大谷休泊の墓	県史跡 (遺跡)	中世の開拓者大谷休泊の墓。戦国時代の館林城主長尾顕長の招きに応じて領内に住み、渡良瀬川からの用水(上休泊堀)と多々良沼からの用水(下休泊堀)を引いて、周辺の田畑を潤した。多々良沼周辺の松林は大谷休泊の植林事業によるものである。	
⑨	かみ み ばやし 上三林のささら	市無形民俗 (民俗芸能)	館林市南西部の上三林町に伝わる民俗芸能。多々良沼からの用水によって、二毛作が盛んとなった地域で、江戸時代中期から五穀豊穰と厄病神追払の祭事として行われてきた。町内の雷電神社の祭礼に合せて棒術と獅子舞を奉納しながら、地区内を巡行する。	上三林 雷電神社
⑩	ほうないけいかい ず し 封内経界図誌	県重文 (歴史資料)	安政 2 年(1855)に館林城主秋元志朝によって作成された領内 52 か村の彩色村絵図。村ごとに土地利用が色分けされ、江戸時代の沼の形が一目でわかる。河川や田畑、集落の範囲も描かれ、人々の暮らしと沼との関わりを知ることができる。	館林市第 一資料館
⑪	ぬま ぎょぐ ひなたぶね 沼の漁具と日向舟	未指定 (有形民俗)	館林市内の沼では、広く網を仕掛けて、舟に乗って集団で行う追い込み漁のほか、ハズ漁・ヤス漁などが行われ、さまざまな漁具が生まれた。沼によって使用する舟も形が違い、多々良沼の舟は、冬に凍結した氷から舟べりを保護するために一枚板を取り付けており、「日向舟」と呼ばれている。	館林市第 一資料館
⑫	かわざかなりょうり 川魚料理 (なまざ こい ふな うなぎりょうり (鯰・鯉・鮒・鰻料理))	未指定 (無形民俗)	沼が点在する館林地域では、昔から鯰・鯉・鮒・鰻などの川魚料理が食されてきた。館林のもてなし文化の特徴として、川魚料理をふるまうことがある。中でも鯰が有名で、天ぷらや小麦粉をあえて揚げたタタキアゲは、この地域の代表する料理となっている。	
⑬	じょうぬま 城沼	未指定 (名勝地)	館林市中央部にある、周囲約 5 kmの東西に細長い沼。西岸に館林城が築かれ、江戸時代は人を寄せつけない「守りの沼」となっていた。南岸に名勝「躑躅ヶ岡」があり、北岸には「つつじ伝説」を伝える善長寺がある。春はつつじ、夏は花ハス遊覧を楽しむことができ、沼辺を周遊する「文学の小径」や「朝陽の小径」では、四季折々の景観を見ることができる。	

⑭	じょうもうたてばやしじょうぬましよさんすいそう ず 上毛館林城沼所産水草図	市重文 (絵画)	江戸時代末(1845 年)に描かれた巻物で、当時の城沼に生息していた水草などを描いた彩色図譜。オニバス、ジュンサイなど 12 種類の花や藻などが見られ、今は消滅した城沼の動植物を知ることができる。	館林市第一資料館
⑮	たてばやしじょうせき 館林城跡 (三の丸土橋門・城沼墓田碑)	市史跡 (城跡)	館林城は城沼を要害とした城で、沼に突き出た台地の地形を巧みに利用して造られた。三の丸には江戸時代の土塁が残り、復元された土橋門と一体となって城跡の面影を伝える。また、明治維新後の旧藩主による城沼開拓に関わる記念碑がある。	
⑯	おびきいなりじんじゃ 尾曳稲荷神社	未指定 (建造物)	城沼を望む台地上にあり、館林城築城の白狐縄張り伝説に由来する神社。城の鬼門(北東)となる稲荷郭に位置し、館林城の鎮守となった。境内には館林城改修で奉納された手水鉢や、城沼の景観を詠んだ館林出身の文豪田山花袋の歌碑がある。	
⑰	たてばやしじょううま 館林城絵馬	市重文 (絵画)	幕末の館林の浮世絵師北尾重光が、館林城と城沼を描いた極彩色の絵馬。明治 6 年(1873)に尾曳稲荷神社に奉納された。城沼が鮮やかな青色で塗られ、城の建物が沼に浮かぶように描かれ、「守りの沼」を鳥瞰することができる。	尾曳稲荷神社
⑱	つつじがおか(つつじ) [つつじが岡公園]	国名勝	城沼南岸にあるつつじの名勝地。城沼に入水した女人「お辻」を偲んでつつじが植えられた伝説があり、歴代の館林城主の保護のもとで、回遊式の大名庭園となった。樹齢 800 年を超えるヤマツツジやキリシマツツジの古木群など約 1 万株のつつじが植えられ、城沼と一体となった景観は、「花山」と呼ばれ親しまれている。	つつじが岡公園
⑲	ぜんどうじ さかきばらやすまさ はか 善導寺(榊原康政の墓)	県史跡(*榊原康政の墓)	城沼北東岸にある、近世初代城主榊原康政の菩提寺。榊原康政は、沼に面した館林城をより堅固な城にするため、台地上に城下町を整備し、周囲の低湿地を開発して治水・利水事業を進め、守りを一層固めた。境内には康政をはじめとする榊原家の墓所があり、城と城沼の歴史を物語る。	
⑳	ぜんちょうじ しやうしついでん はか 善長寺(祥室院殿の墓、お辻・松女の墓)	市史跡(*祥室院殿の墓)	城沼北岸にある寺院で、沼の対岸に名勝「躑躅ヶ岡」がある。境内にはつつじを愛でたという榊原忠次の母「祥室院殿の墓」や、「つつじ伝説」を伝える「お辻・松女」の供養墓がある。つつじの季節には、対岸のつつじが岡を結ぶ渡船が運航される。	
㉑	たつ い・せいりゅう いど 竜の井・青龍の井戸	未指定 (遺跡)	城下町に残る城沼に関わる井戸。竜の井は城下町にあった時の善導寺の境内にあり、女人の姿をした城沼に棲む龍神の妻が、寺の説話を聞いて井戸に姿を消した伝説が残る。竜の井と城沼の間にはもう一つの青	

			龍の井戸があり、徳川綱吉が館林城主の時に、この井戸から女官姿の清瀧権現が姿を現したといわれる。井戸の水は霊水として珍重されてきた。	
②②	きゅうたてばやしほん しじゅうたく 旧館林藩士住宅	市重文 (建造物)	館林城に仕えた藩士の武家屋敷。茅葺き屋根の建物で、館林藩士の暮らしの様子を伝える。屋根の茅は、沼茅(葦)が主に利用されてきた。明治維新後、士族授産による城沼の開発に多くの館林藩士たちがかかわった。	鷹匠町武家屋敷 「武鷹館」
②③	こせきあらいげき 古蹟洗堰	未指定 (遺跡)	城沼の水を排水し、水位を調節するための堰。「洗堰」の由来は、中世の武将楠木正成が敗死し、その首を持って逃げてきた家臣たちがこの堰で首を洗ったという伝説による。堰の脇に石碑と楠木神社が建つ。現在、城沼の水はこの堰から鶴生田川・谷田川を経由して渡良瀬川に流れ込む。	
②④	ちくぶしまじんじや 竹生島神社	未指定 (建造物)	江戸時代は城沼の入り江となっていた場所で、弁天が祀られて「浮島弁天」と呼ばれ、明治期に城下町の近江商人によって琵琶湖の竹生島神社を勧請した。境内に昭和初期に行われた城沼耕地整理記念碑があり、低湿地開拓の歴史を物語る。	
②⑤	じょうぬま わた ぶね 城沼の渡し舟	未指定 (無形民俗)	城沼の渡し舟は、明治時代の館林駅開業によって、駅からつつじが岡へ向かう最短ルートとして行楽客に利用された。昭和初期まで竹生島神社脇に「弁天の渡し」があったが、現在は「尾曳の渡し」と「善長寺の渡し」から運航され、7・8月には花ハスクルーズの遊覧船が運航される。	
②⑥	こむろすいうん 小室翠雲画 「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」	未指定 (絵画)	館林出身の画家小室翠雲が、明治28年(1895)に描いた彩色画。「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」と題し、城沼とつつじが岡に集う人々が描かれ、明治時代の沼辺景観を見ることができる。	館林市第一資料館
②⑦	きゅうあきもとべっぺい 旧秋元別邸	未指定 (建造物)	館林最後の城主秋元氏ゆかりの和風建築物で、明治末期に城沼を望む館林城の八幡郭に建てられた。主屋に広間があり、離れ座敷に茶室と洋館がある。庭園には沼で投網をする秋元氏の銅像があり、つつじや花菖蒲、モミジなどが植えられている。四季を通じて沼辺文化を彩る、館林の迎賓館としての役割を果たしている。	つつじが岡 第二公園
②⑧	しょうだしょうゆ きゅうてんぼ 正田醤油(株)旧店舗・ 主屋[正田記念館]	国登録有形 (建造物)	城下町で江戸時代から商家を営む正田家は、「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦や大豆を材料にして、明治6年(1873)に醤油醸造を開始した。正田記念館は嘉永6年(1853)建築の店舗・主屋で、正田家の歴史と醤油醸造に関する資料が展	正田記念館

			示されている。	
②9	とうぶてつどうたてばやしえき 東武鉄道館林駅	未指定 (建造物)	明治40年(1907)に東武鉄道が川俣から足利まで開通した際に開業。駅舎は昭和12年(1937)建築の木造2階建てモルタル瓦葺で、正面中央に時計をはめこんだ意匠が特徴。明治末期から城沼とつつじが岡を訪れる行楽客の玄関口となってきた。	
③0	そうぎょう きにつしんせいふんたてばやしこうじょうじ 創業期日清製粉館林工場事務所 [製粉ミュージアム本館]	未指定 (建造物)	明治43年(1910)に日清製粉株式会社館林工場の事務所として建てられた木造2階建ての洋風建造物。「実りの沼」によって育まれた館林特産の小麦を原料として、日本近代製粉業発展の歴史を伝える。創業110周年を記念して製粉ミュージアム本館として公開された。	製粉ミュージアム
③1	きゅうじょうもう 旧上毛モスリン事務所	県重文 (建造物)	明治42年(1909)に、城沼を望む館林城二の丸跡に建設された毛織物工場の事務所。木造2階建ての洋風建造物。近代館林の産業発展を支え、城沼の守りを生かした工場群となっていた。花の季節には、従業員の慰安でつつじが岡へと繰り出した。	館林市第二資料館
③2	ぶんぷくしゅぞうてん ぼ 分福酒造店舗 [毛塚記念館]	国登録有形 (建造物)	江戸時代から、城下町で酒造業を営んでいた木造2階建ての商家。建物の脇に「龍水の井戸」と呼ばれる井戸があり、かつて「龍水」という銘柄の清酒を醸造・販売していた。里沼の水源となる良質な地下水により、城下町に酒造業が発達した。	毛塚記念館
③3	きゅうたてばやししんようきん こ しやく 旧館林信用金庫[市役所市民センター分室]	未指定 (建造物)	大正末期に発足した館林信用金庫の近代建物。昭和9年(1934)建築で、鉄筋コンクリート造2階建て、タイル貼りの外壁や入口の装飾が特徴。大正から昭和初期にかけて町の経済発展を担い、沼辺のもてなし文化の原動力となった。	市役所市民センター分室
③4	きゅうたてばやしにぎょうけんぼんくみあい じ 旧館林二業見番組合事務所	国登録有形 (建造物)	昭和13年(1938)建築の、芸妓置屋と料理店業を兼ねた「二業見番組合」の事務所。木造2階建ての重厚な瓦屋根が特徴で、2階に芸妓の稽古用の舞台と広間があり、昭和前期の館林の花街の中核となった。花の季節にはつつじが岡で館林の芸妓たちが行楽客を迎え入れ、沼辺のもてなし文化に華を添えた。	
③5	た やま か たいきゅうきょ 田山花袋旧居	市史跡	江戸時代後期に建てられた茅葺き屋根の武家屋敷で、館林出身の文豪田山花袋が、明治初期の少年期に過ごした。花袋は城沼や城跡の風景をこよなく愛し、小説「ふるさと」にはこの家や城沼の景観が克明に描かれている。	館林市第二資料館

③⑥	^{た やま か たい かん れん し り ょ う} 田山花袋関連資料 (田山花袋記念文学館)	未指定 (歴史資料)	城沼を間近に望む田山花袋記念文学館には、代表作『蒲団』『田舎教師』などの初版本のほか、原稿、書簡、日記、愛用品など、田山花袋に関する資料約1万点が所蔵されている。展示室には、小説「ふるさと」の自筆原稿と城沼の古写真があり、沼辺を愛した花袋文学の世界へといざなう。	田山花袋記念文学館
③⑦	^{な て ば や し} 館林のうどん	未指定 (民俗)	江戸時代に「饅頭粉」(小麦粉)は館林藩の特産として将軍家への献上されていた。「里沼」と利根川・渡良瀬川がもたらす豊富な水資源が小麦栽培に適した肥沃な大地を生み、長い日照時間と赤城おろしと呼ばれるからっ風による乾燥した気候からうどんの産地となった。“麦都”館林のもてなし文化に欠かせない名産品である。	
③⑧	^{む ぎ ら く がん} 麦落雁	未指定 (民俗)	大麦粉を利用して作られた麦落雁は、館林を代表する銘菓で、文政年間(1818～30)に完成して以来、館林城主献上の栄を賜ったという。城下町に根付いた茶道菓子から発展し、明治時代には「つつじが岡」の園内で館林名産として販売され、沼辺のもてなし文化を彩るものとなった。	

(※1) 文化財の名称には適宜振り仮名を付けること。

(※2) 指定・未指定の別、文化財の分類を記載すること(例：国史跡、国重文(工芸品)、県史跡、県有形、市無形等)。

(※3) 各構成文化財について、ストーリーとの関連を簡潔に記載すること(単に文化財の説明にならないように注意すること)。

(※4) ストーリーのタイプがシリアル型の場合のみ、市町村名を記載すること(複数の都道府県にまたがる場合は都道府県名もあわせて記載すること)。

構成文化財の写真一覧

① 茂林寺沼及び低地湿原



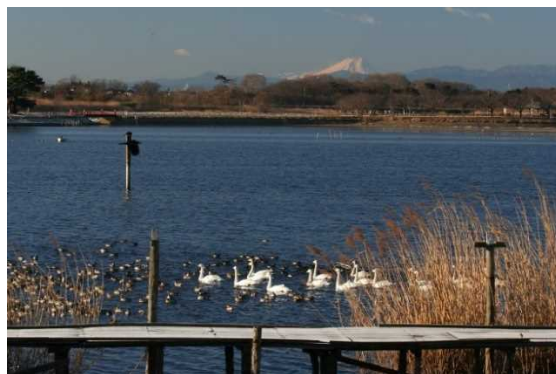
④ 堀工町のどんと焼き



② 茂林寺(分福茶釜)



⑤ 多々良沼



③ 茂林寺のラカンマキ



⑥ 多々良沼遺跡(カナクソ)



⑦^{ないりくこききゆう}内陸古砂丘



⑩^{ほうないけいかいずし}封内経界図誌



⑧^{おおやきゆうはくほか}大谷休泊の墓



⑪^{ぬまぎょぐひなたぶね}沼の漁具と日舟



⑨^{かみみばやし}上三林のささら



⑫^{かわざかなりようりなまずこいふなうなぎりようり}川魚料理(鯰・鯉・鮒・鰻料理)



⑬ 沼城^{じょうぬま}



⑰ 馬絵城林館^{たてばやしじょう え ま}



⑭ 上毛館林沼所産水草図^{じょうもうたてばやしじょうぬましよさんすいそうず}



⑱ 躑躅ヶ岡(躑躅)[つつじが岡公園]^{つつじが おか つつじ おかこうえん}



⑮ 館林城跡(三の丸土橋門・沼城墓田碑)^{たてばやしじょうせき さん まる どぼしもん じょうぬまこんでん ひ}



⑯ 尾曳縮荷神社^{おびきいなりじんじや}



⑲ 善導寺(榊原康政の墓)^{ぜんどうじ さかきばらやすまさ はか}



⑳ 善長寺(祥室院殿の墓、お辻・松女の墓)



㉓ 古蹟洗堰



㉔ 竹生島神社



㉑ 龍の井・青龍の井戸



㉕ 城沼の渡し舟



㉒ 旧館林藩士住宅



②⑥ 小室翠雲画「邑楽公園躑躅ヶ岡之図」



②⑨ 東武鉄道館林駅



②⑦ 旧秋元別邸



③⑩ 創業期日清製粉館林工場事務所
[製粉ミュージアム本館]



②⑧ 正田醤油(株)旧店舗・主屋[正田記念館]



③① 旧上毛モスリン事務所



③② ぶんぶくしゅぞうてん ぼ けづか きねんかん
分福酒造店舗[毛塚記念館]



③⑤ た やま か たいきゅうきょ
田山花袋旧居



③③ きゅうたてばやししんようきん こ
旧 館林 信用金庫
しやくしよしし ぶん
[市役所市民センター分室]



③⑥ た やま か たいきんれん しりょう
田山花袋関連資料
た やま か たい き ねんぶんがくなん
[田山花袋記念文学館]



③⑦ なてばやし
館林のうどん



③④ きゅうたてばやし に ぎょうけんばんくみあいじ ねんしよ
旧 館林 二 業 見 番 組 合 事 務 所



③⑧ むぎらくがん
麦落雁



日本遺産を通じた地域活性化計画

(1) 将来像 (ビジョン)

1) 認定目的と館林市のビジョン

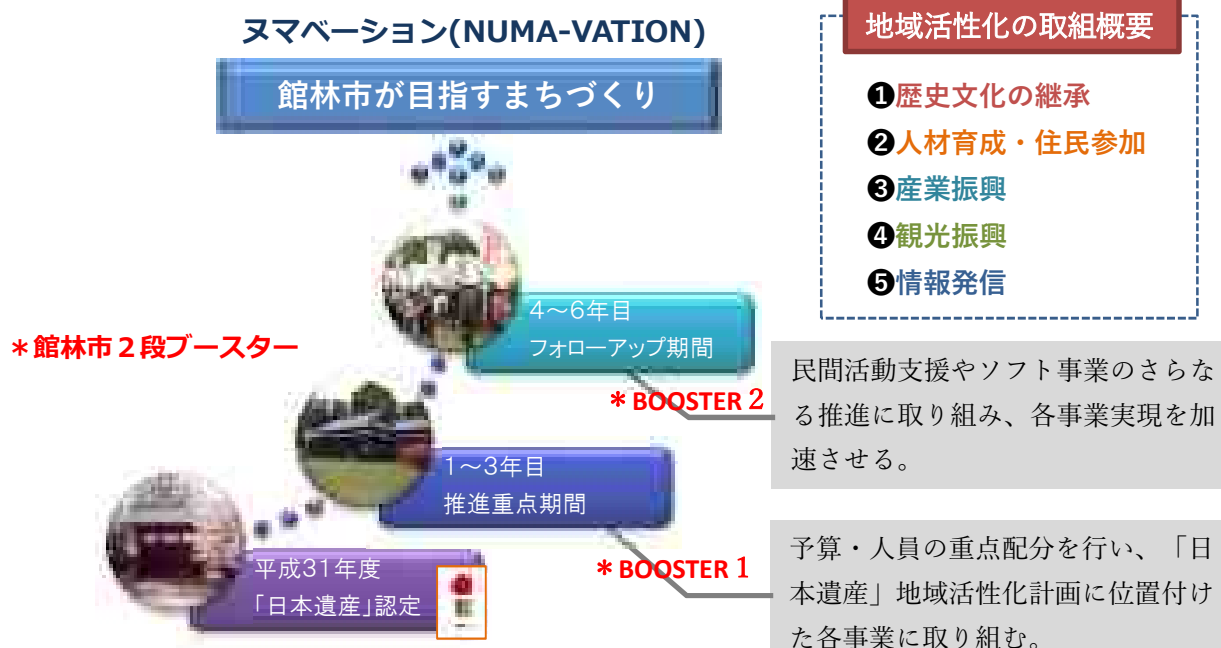
館林市は、古代から守り続けてきた沼と沼辺、低湿地などの「里沼」景観、館林城と城下町を基盤として発展した証である文化財や建造物などの歴史文化遺産を数多く有している。そして、これまでも地域の人々が歴史文化や観光、まちづくりなど様々な分野で自主的・精力的に活動してきた。地域振興・地方創生ための萌芽は既にできている、それぞれの活動は存在するものの、個々の事業の連携・協働による魅力発信につなげることが、残念ながら十分ではなかった。館林市は「日本遺産」認定を通して、各分野の事業を担う組織・団体を“横串”でつなぎ、各事業をさらに磨きあげ、地域の魅力を世界に発信することを第一の目的とする。

館林市の最大の特徴である「里沼」に関しても、これまでの事業ではそれぞれの沼の魅力が秘めた潜在能力を十分に開花させることができなかった。この「日本遺産」認定を契機として、「沼辺(Numabe)」+「イノベーション(Innovation)」=「ヌマベーション(NUMA-VATION)」を合言葉として、各分野の組織・団体とその活動に新たな局面を開くものである。

人口減少と超高齢社会の進展する中で、館林市は「日本遺産」認定を通して、歴史や文化など地域の魅力を広くPRし、観光や産業分野を含めた地域全体の総合的な活性化につなげていく。また、地元はもとより、館林市を訪れる人々が互いを認め合い、共に生きる社会=“沼辺の多様性”を地域特色とし、それを次世代に継承するための“持続可能なまちづくり”の実現にも取り組むものとする。

2) 計画推進フロー

「日本遺産」認定後6年間を計画推進期間とし、次項「(2)」以降の様々な地域活性化の取組を実施する。計画年度1～3年目までを「日本遺産」推進重点期間とし、「日本遺産」推進に係る予算及び人員を重点配分し、その後4～6年目までの期間をフォローアップ期間として、民間活動の支援やソフト事業のさらなる推進を図る、独自の『館林市2段ブースター』を設定し、計画から実行の推進力をゆるぎないものとし、また実行のスピードも段階的に加速させるものとする。



3)関連計画への位置づけ

次期市総合計画(館林市第六次総合計画。平成33年度開始予定)をはじめとする市の各種基本計画、観光及び産業分野における各種実行計画にも「日本遺産」関連事業の位置づけを行う。そして、文化財保存・活用の観点からは、文化財保護法改正後に策定が求められる文化財保存活用地域計画と、各文化財の保存活用計画策定を行いながら、歴史や文化など地域の魅力を次世代まで継承するための計画策定に取り組む。

4)ターゲットと戦略

館林市「日本遺産」の来訪者のメインターゲットは、国内＝関東圏、国外＝台湾・タイ・スペイン・アメリカと明確に位置付ける。

①国内ターゲット ⇒⇒⇒ 関東圏

館林市は東京近郊に所在し、交通(鉄道・自動車)アクセス環境が良いにも関わらず、“地の利”を十分に発揮できていない。同じく東京近郊の埼玉県川越市は、平成28年度に約704万人、平成29年度には約663万人の観光入込客数を誇り、年間を通じて人の波が絶えない。一方で館林市の観光入込客数データは、平成28年度約168万人、平成29年度は約171万人と伸び悩み、川越市と観光面で大きな差が出ている。

館林市は「日本遺産」認定後の国内来訪者のメインターゲットを関東圏とし、日帰りで、気軽に楽しめる「安・近・短」をキーワードとして、四季に応じてリピーター来訪できる環境を整備する。特に「日本遺産」の「里沼」ストーリーと連動させることで、沼辺の歴史文化のみならず、自然や景観を満喫しながら、市内を回遊できるような事業実施に取り組む。また、関東で沼を有する自治体同士で連携し「沼辺サミット」を開催し、環境保全と観光振興を基盤として情報発信をすることで、関東圏からの集客強化も見込む。

①国内ターゲット

- ・城下町(蔵の町並み)
- ・首都圏近郊
- ・交通アクセス

観光入込客数
663万人

例)川越市

館林市

- ・里沼(景観・体験活動・食文化)
- ・城下町・近代産業遺産
- ・首都圏近郊
- ・交通アクセス

観光入込客数
171万人⇒目標**200万人**

【戦略】安い・近い・短時間

- ①関東圏からの集客強化
- ②おもてなしによるリピーター獲得

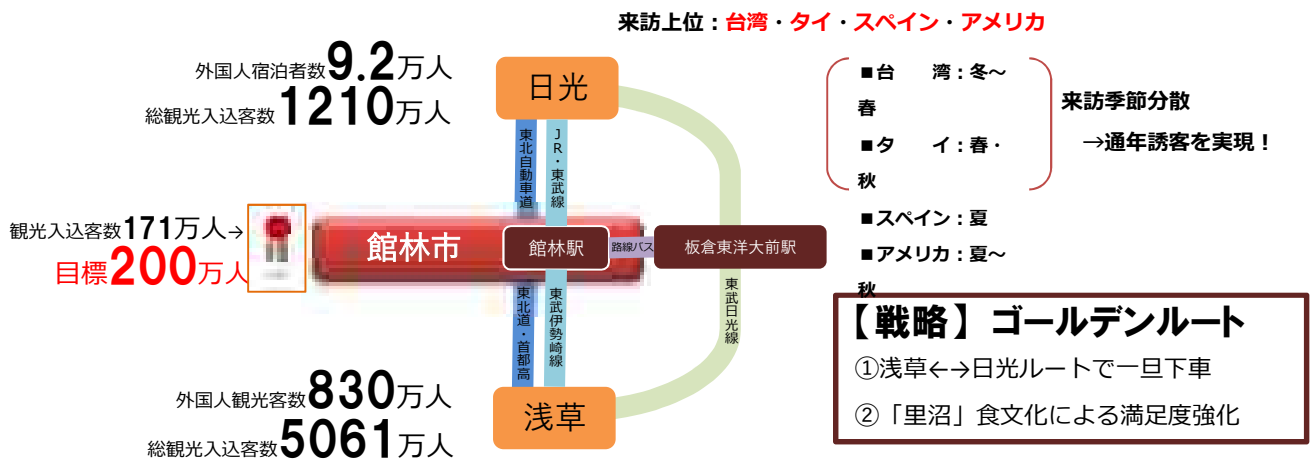
②国外ターゲット ⇒⇒⇒台湾・タイ・スペイン・アメリカ

館林市は、江戸と日光のちょうど中間地点に位置することから、江戸時代には館林城が築かれ日光脇往還も整備された。近代にかけては東武鉄道開通や東北自動車道開通により交通の要衝として栄えてきた。

「日本遺産」制度の大きな狙いの一つは、外国人インバウンドである。鉄道の観点から考えると、館林市には東京浅草駅から東武伊勢崎線が通り、館林市に隣接する板倉町には東武日光線の板倉東洋大前駅があり、いずれも、浅草駅から日光へ向かう線上に所在している。注目すべきは浅草周辺と日光はともに外国人観光客が訪れる国内有数のスポットであるという事実である。浅草のある台東区は平成28年度統計で、約5,061万人の観光客が訪れ、うち830万人が外国人観光客である。また、平成28年度の日光市の観光入込客数は約1,210万人であった。「日本遺産」認定を契機として、浅草ー日光ルートの中で一旦下車していただき、外国人観光客に館林市を楽しんでいただくポテンシャルは非常に高い。日光への国別外国人観光客動向をみると、平成28年度は①台湾14.0% ②フランス11.3% ③タイ10.1% ④スペイン9.0% ⑤アメリカ7.4%と続き、それぞれ来訪の時期が分散しているので、年間を通して誘客できる可能性があり、日光を意識した絞りかたが効果的であると考えられる。（*②フランスについてはあまり海外旅行をしない国民性があり、国内に低湿地帯も多いことから、ターゲットから除く）

日光に来る外国人観光客を対象にアンケートをした結果（* 足利銀行シンクタンク実施）を参考にすると、日光では歴史文化遺産や自然は楽しんでいるが、宿泊や食に対しては満足度が低かったという結果が出ている。よって館林市では「食のまち」として、「里沼」が体感できる食を活かしたサービスの提供を強みとし、「日本遺産」認定後の各事業を戦略的に展開する。

②国外ターゲット



館林市における「日本遺産」地域活性化の取組概要

①歴史文化の継承

構成文化財をきちんと保存・活用する

1-1) 文化財保護・活用体制整備の推進	1-4) 拠点施設での「里沼」ワークショップ充実
1-2) 「たてばやし里沼ブランド」創設検討	1-5) 「歴史の小径」案内看板・サイン整備
1-3) 活用事業「文化財ルネツサンス」推進	1-6) 市民協働によるつつじ保全

②人材育成・住民参加

地域活性化を支える人や活動を育てる

2-1) 市民活動参加者・賛同企業増加	2-4) 総合学習・出前講座による地域魅力再発見
2-2) ヌマベーション連絡協議会設置	2-5) 「日本遺産」提案事業コンペ実施
2-3) ランドナビゲーター育成	

③産業振興

地域の基盤となる産業を盛り上げる

3-1) 統一デザイン設置による PR	3-4) インターンシップ受入れと次世代育成
3-2) 商品開発における企業連携促進	3-5) 体験ツアー及び工場見学ツアー実施
3-3) 地元高校・大学との産官学連携事業	

④観光振興

来訪者の満足度を高めるコンテンツを揃える

4-1) マーケティング戦略	4-5) ガイダンスセンター「旧秋元別邸」活用
4-2) つつじが岡公園の四季型利用促進	4-6) 関連見学施設との連携・回遊性向上
4-3) ぐんま DC(平成 32 年度開催)相乗効果	4-7) 鉄道・バスを利用したツアー企画
4-4) 麦食文化・川魚食文化 PR	4-8) 田山花袋の「沼辺の行楽」再現ツアー

⑤情報発信

館林市「里沼」の魅力を世界に発信する

5-1) 「日本遺産」Web サイト開設	5-5) 「日本遺産」連携シンポジウム等開催
5-2) VR 映像制作・アクセス環境整備	5-6) ゆるキャラ・ご当地アイドル PR 活動
5-3) ガイドブック・パンフレット作成	5-7) 「日本遺産」写真公募展や絵画コンクール
5-4) 「日本遺産」ロゴ・館林市独自ロゴ作成	

「里沼の継承・発展」

シビックプライド醸成

交流人口の増加

① 歴史文化の継承 ⇒構成文化財をきちんと保存・活用する

平成30年度に策定した「館林市歴史文化基本構想」を土台として文化財保護・活用体制整備を推進する。館林市独自の文化財認定制度「(仮称)たてばやし里沼ブランド」創設も視野に入れながら、市民一丸となって未指定文化財の把握につとめる。平成18年度から市で実施している歴史的建造物活用事業「文化財ルネツサンス」を民間物件に拡大して魅力体感イベントを推進するとともに、つつじ・麦・館林紬等を使った「里沼」体験ワークショップを展開する。また、市街地にある「歴史の小径」沿道の案内看板及びサイン整備により来訪者が回遊しやすい環境づくりを進める。さらに、民間主導(館林つつじサポーターズ倶楽部)によるつつじ保護を支援し、歴史文化を活かした地域活性化に取り組む。

② 人材育成・住民参加 ⇒地域活性化を支える人や活動を育てる

市民が気軽に「日本遺産」に参加できる環境の整備、“持続可能なまちづくり”のための仕組みづくりを目的として、市内の各沼に関わる団体・組織をつなぐ協議会を設置し、未来型「里沼」イノベーションを行う。また、既存ボランティアガイドの枠を超え、市内観光を総合的にプロデュースできる人材「ランドナビゲーター」の育成を行うとともに、東京大学「異才発掘プロジェクトROCKET」から生まれた学習プログラムを基礎とした総合学習・出前講座を積極的に展開する。さらに事業コンペによる民間活力・アイデア導入による市民参加型事業の支援を進め、次世代のまちづくりを担う人材や地域ビジネスの萌芽を育てる。

③ 産業振興 ⇒地域の基盤となる産業を盛り上げる

市内店舗・地元企業等に幟・暖簾・ステッカー等を設置して一体感の醸成を図り、中心市街地を含む地域全体での商業活性化に取り組む。また、近年の相次ぐ新商品開発を背景として、各事業者とクリエイターの協働による「日本遺産」ブランドを活用した新商品・サービスの開発・提供を行い、地場産品の再生を促進する。さらに地元高校生や観光・まちづくり系学部のある大学(包括協定のある東洋大学など)の学生・留学生との産官学連携により、若者や訪日外国人のトレンドを捉えた事業を行いながら、農業・漁業のイノベーションと産業活性化を推進する。体験・工場見学ツアー実施にあたっては、「里沼」の魅力を体感できると独自性のある「コト消費」プログラム創出に重点を置き、地域全体での総合的な産業振興を行う。

④ 観光振興 ⇒来訪者の満足度を高めるコンテンツを揃える

民間委託によるマーケティング調査を実施し、来訪者を受入れるために不足している食・土産物・宿泊・交通などのリサーチを行い、「もてなしの心」充実によるリピーター獲得に取り組む。まず、つつじ時期以外でも沼辺の回遊式庭園を散策し、魅力を満喫できるよう四季型利用を促進し、「ぐんまディスティネーションキャンペーン」との相乗効果による「日本遺産」認知度と館林市ストーリーのさらなる発信に努める。また、名産のうどんに加えてラーメン・菓子などの麦食文化と、「里沼」を象徴する鯰・鯉・鮒など独自の川魚食文化とその味わいをPRする。そして、「旧秋元別邸」を「日本遺産」ガイドセンターに位置づけ、“館林市の迎賓館”としての再生・活用を進めるとともに、館林市・群馬県・民間企業の見学施設間での回遊性向上のための事業を展開する。さらに、交通事業者やテーマパーク等と連携し、つつじ子房摘み・麦秋見学・手筒花火・花ハスクルーズ・麦踏み体験・フィッシング・館林紬着付け体験・茶席等を盛り込んだ首都圏からの日帰り「里沼」体験ツアーを実施し、館林市「日本遺産」ストーリーと連動した(A)祈りの沼ツアー[茂林寺沼]・(B)実りの沼ツアー[多々良沼]・(C)守りの沼ツアー[城沼]を設定する。館林出身の明治の文豪田山花袋が「一日の行楽」で書いた行楽ルートも再現し、渡し舟乗船や特製行楽弁当を楽しむツアーを実施する。

⑤ 情報発信 ⇒館林市「里沼」の魅力を世界に発信する

館林市「日本遺産」Webサイトの開設とインターネットTVによる動画配信を行うとともに、VR映像を制作し情報発信面で活用する。公衆WiFiスポット増加によるネット環境の整備や、ガイドブック・パンフレットの多言語化に取り組む。また、公募による市独自ロゴを作成して視覚的な統一感の醸成を図るとともに、ロゴ使用権による推進協議会の将来的なロイヤリティ収入確保も検討する。さらに既認定自治体と連携したシンポジウム及び「沼辺サミット」を開催しながら、従来では交流の無かった自治体との協働事業を展開する。各種事業では、公式キャラクター「ぼんちゃん」、ご当地アイドル「Menkoiガールズ」や市民劇団を活用したイベントの実施のほか、写真公募展や絵画コンクールを開催して四季折々の館林市の魅力をPRする。

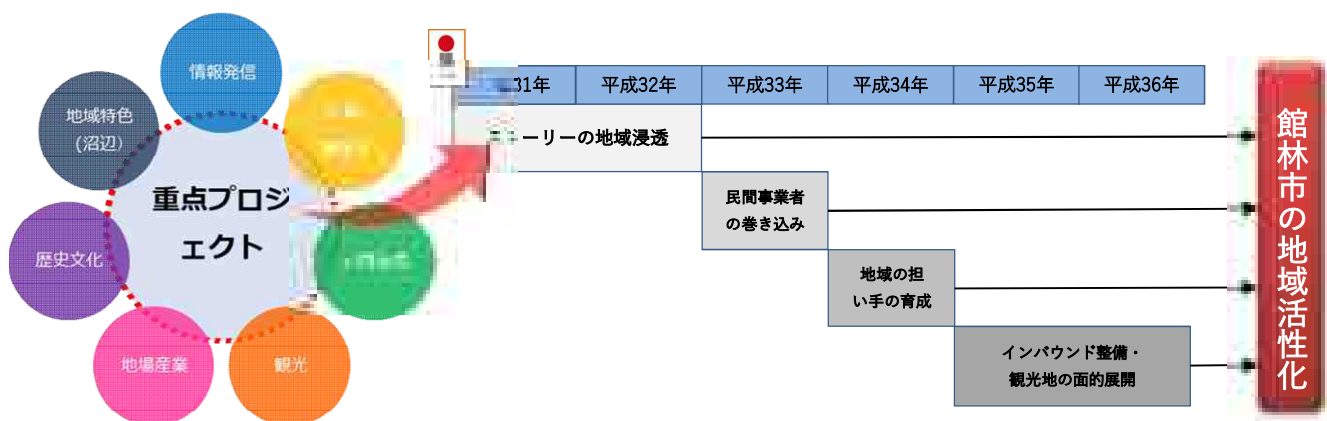
(3) 自立的・継続的な取組

1) 協議会設置

館林市「日本遺産」認定後の推進体制として、次項「(4)実施体制」のとおり協議会等を設置する。行政のみならず、観光関係、産業関係、有識者及び市民団体等の幅広い分野からの参画を見込み、市民が一体となり、来訪者に「もてなしの心」を提供する体制を整える。同協議会では「日本遺産」認定後の各種補助事業の申請事務のほか、事業計画の策定、事業内容の検討と進捗管理を行うものとする。推進体制の主体である(仮称)館林市「日本遺産」推進協議会については、ロイヤリティ収入や活動支援金などの設定・導入も検討しながら独自財源を発掘し、将来的な日本版DMO化も視野に入れる。

2) 「重点プロジェクト」

先に記載した「(2)地域活性化のための取組の概要」の各分野における地域活性化事業は連動可能なものが多いことから、パッケージ化できる事業群を「重点プロジェクト」として設定する。「重点プロジェクト」については、年度ごとにテーマを定め認定初年度及び平成32年度は「ストーリーの地域浸透」、平成33年度は「民間事業者の巻き込み」以下、平成34年度「地域の担い手の育成」、平成35・36年度「インバウンド整備・観光地の面的展開」として段階的に取り組みながら、館林市「日本遺産」を成熟させ、地域の総合的な活性化につなげていく。



3) 事業進捗管理

館林市「日本遺産」推進協議会により、PDCAサイクルに基づいた進捗管理を行うものとする。館林市「日本遺産」における「重点プロジェクト」や各分野の具体的事業については、明確な成果指標を設定し、数値的に効果を測定するものとする。効果測定による不足は協議会によりフォローアップを実施し、事業内容の検討・改善に継続して取り組むものとする。

(4) 実施体制

①(仮称)館林市「日本遺産」推進協議会

1) 組織概要：館林市「日本遺産」推進のための事業主体

2) 構成団体(案)：迅速かつ的確な意思決定を行い、地域全体での一体感と協力体制を確立する

- ・行政＝館林市・館林市教育委員会
- ・団体[観光]＝館林市観光協会
- ・団体[産業]＝館林商工会議所
- ・団体[農業]＝JA邑楽館林
- ・団体[公共交通事業者]＝鉄道/バス会社等
- ・有識者[歴史文化]＝元博物館職員/大学講師(歴史学・博物館学)
- ・有識者[観光]＝大学教授(観光学科)
- ・市民団体[つつじ]＝館林つつじサポーターズ倶楽部(つつじ保護育成団体)
- ・オブザーバー＝群馬県教育委員会(文化財保護課)

3) 活動資金：

- | | | | |
|---------|--|-------------|-------------|
| ①文化庁補助金 | 初年度＝3,640万円 | 2年目＝2,140万円 | 3年目＝1,240万円 |
| ②市助成金 | 初年度～6年目＝年間100万円 | | |
| ③活動支援募金 | 想定＝年間80万円（個人1,000円×300名／団体・法人5,000円×100団体） | | |
| ④その他 | 市独自ロゴによるロイヤリティ収入等も検討する | | |

②(仮称)館林市「ヌマベーション」連絡協議会

1) 組織概要：各分野の組織・団体、各事業の連絡調整を図る協議会

2) 構成団体(案)：「日本遺産」を契機に「里沼」に関わる人々をつなぐネットワークを構築する

- ・行政＝館林市・館林市教育委員会・群馬県館林土木事務所
- ・団体[城沼・茂林寺沼・多々良沼・近藤沼・蛇沼]＝各沼の関係者
- ・有識者[まちづくり]＝まちづくりNPO主宰者
- ・市民団体[歴史文化]＝文化財ボランティア団体
- ・市民団体[観光]＝観光ボランティアガイド団体
- ・市民団体[まちづくり]＝まちづくり研究グループ
- ・市民団体[つつじ]＝つつじガイドボランティア団体

③館林市「日本遺産」地域プロデューサー

1) 概要：各分野の事業展開を進めるための地域プロデューサー

2) 構成者(案)：企画・調整や人材育成能力をもち、各分野で既に活動実績があることを重視する

- ・情報発信＝デザイナー兼地域活性化団体代表
- ・地域活性化＝まちづくり研究グループ代表
- ・人材育成＝大学特任教授(まちづくり・地域コミュニティ)
- ・観光＝まちづくりNPO主宰者
- ・地場産業＝元地元企業広報担当者
- ・歴史文化＝文化財ボランティア団体顧問
- ・地域特色(沼辺)＝水ジャーナリスト



(5) 地域活性化計画における目標と期待される効果		定量的評価：		別紙①のとおり		
期待される効果：	①「里沼」の継承・発展 館林市の沼辺文化を生んだ「里沼」環境や歴史文化が適切に保存・継承され、観光・産業や人材育成などのまちづくり面での活用・発展が促進される。					
	②シビックプライドの醸成 館林市内に各分野の組織・団体の新たな連携体制が構築され、各事業がブラッシュアップされることで、地域住民にシビックプライドが醸成される。					
	③交流人口の増加 「日本遺産」を通じて館林市への来訪者のみならず、他地域・他国との交流が活発になり、交流人口が増加する。また、市民一体となった「もてなしの心」により、満足度が向上しリピート来訪が増える。					
(6) 日本遺産魅力発信推進事業			別紙②のとおり			
事業費：	平成31年度：	36,400千円	平成32年度：	21,400千円	平成33年度：	12,400千円
(7) その他事業			別紙③のとおり			

(5) 地域活性化計画における目標と期待される効果

設定目標Ⅰ：	日本遺産を活用した集客・活性化
計画評価指標：	観光客入込み数
具体的な指標：	【たてばやし市民計画2020KPI】年間を通して花まつりや主な観光施設を訪れた観光客数
関連事業：	(6)①、③、⑥、⑦、⑩、⑫、⑬、⑭、⑮、⑯ (7)①、②、③、④、⑤、⑦、⑨、⑭
目標値：	平成 28 年度 168 万人 ⇒ 平成 36 年度 200 万人
設定根拠：	∴市総合計画KPI(H26年度＝164万人)。H28年度実績＝168万人×1.2＝201.6万人≒200万人 ※「日本遺産」認定後は現在データの無い交流人口・関係人口も指標に導入することも検討。
設定目標Ⅱ：	日本遺産を核としたコミュニティの再生・活性化
計画評価指標：	小・中学生における日本遺産の認知度
具体的な指標：	小・中学生における「日本遺産」の認知度
関連事業：	(6)②、⑥、⑦、⑭、⑮、⑯ (7)①、⑨、⑬
目標値：	平成 30 年度 50 % ⇒ 平成 36 年度 70 %
設定根拠：	H30実施市民アンケート結果〔H30.5.3-4〕50% ∴「里沼」を活かした各種講座や総合的な学習の時間等の展開により現状50%×1.4＝70%
設定目標Ⅲ：	日本遺産に関する取組を行うための持続可能な体制の維持・確立
計画評価指標：	日本遺産関連で開発された商品・サービス数
具体的な指標：	日本遺産関連で開発された「たてばやし日本遺産」関連商品・サービス数
関連事業：	(6)⑤、⑥、⑧、⑨、⑩、⑪、⑬ (7)③、⑩
目標値：	平成 30 年度 0 件 ⇒ 平成 36 年度 30 件
設定根拠：	館林市土産ブランド「おみたて」H30年度＝9商品。 ∴産官学連携や事業コンペ・民間事業者連携による新商品・サービス等の開発・提供→30件。
設定目標Ⅳ：	その他
計画評価指標：	その他
具体的な指標：	日本遺産への協力団体数(ガイド団体＋経済団体＋企業＋市民団体)
関連事業：	(6)④、⑥、⑨、⑪、⑯ (7)⑥、⑧、⑪、⑫、⑬、⑭
目標値：	平成 30 年度 8 団体 ⇒ 平成 36 年度 33 団体
設定根拠：	市総合計画KPI(H26年度＝ガイド5団体)。H30年度実績＝ガイド5団体＋経済界3団体＝8団体 ∴H37年度目標＝ガイド5団体＋経済界3団体＋企業10団体＋商業10団体＋市民団体5団体＝33団体

※黄色で着色したセルの内容は変更しないでください。

※目標Ⅰ～Ⅳを複数設定する場合は、設定目標～設定根拠までをコピーして欄を増やしてください。

(6) 日本遺産魅力発信推進事業

事業①:	「文化財ルネツサンス」民間促進のためのPR支援事業					
事業区分:	普及啓発		事業期間:	平成 31 年度 ~ 平成 33 年度		
事業費:	平成31年度:	1,000千円	平成32年度:	700千円	平成33年度:	700千円
事業概要:	活用者とイベント参加者が文化財の魅力を体感できる事業として平成18年度に市有文化財(歴史的建造物)活用事業「文化財ルネツサンス」を開始した。「日本遺産」認定後、当該事業を民間所有物件にまで拡大させるため、活用団体等に対するPR活動(チラシ等印刷)を支援する事業。					
具体的な指標:	民間所有文化財活用イベント開催数					
目標値:	平成 30 年度	3 件/年		⇒	平成 36 年度	10 件/年
事業②:	「里沼」体感！ワークショップ事業					
事業区分:	普及啓発		事業期間:	平成 31 年度 ~ 平成 33 年度		
事業費:	平成31年度:	1,000千円	平成32年度:	1,000千円	平成33年度:	1,000千円
事業概要:	館林市の「里沼」の魅力を体感するとともに、市内見学施設の一層の集客を促進するため、沼・つつじ・麦・館林紬等を使った各種ワークショップ(カヌー・カヤック体験、ウォーキング講座/つつじ子房摘み体験/麦秋見学、麦踏み体験、うどん打ち講座/着物でまち歩き+茶席&座禅、小物づくり講座等)を開催し、コト消費の強化に取り組む事業。					
具体的な指標:	ワークショップ開催数					
目標値:	平成 30 年度	4 回/年		⇒	平成 36 年度	20 回/年
事業③:	「歴史の小径」案内板・サイン整備改修事業					
事業区分:	公開活用のための整備		事業期間:	平成 31 年度 ~ 平成 32 年度		
事業費:	平成31年度:	2,000千円	平成32年度:	1,500千円	平成33年度:	
事業概要:	館林駅から旧秋元別邸・城沼に至るルートで歴史的建造物が点在する裏通り「歴史の小径」の案内板・サインの改修を行う。整備から約20年が経過した案内板・サインを更新するとともに、来訪者の回遊性向上のため新規設置も行う。					
具体的な指標:	平成31年度: 既存設置物の改修数 = 3 箇所 平成32年度: 新規設置数 = 3 箇所					
目標値:	平成 30 年度	3 箇所(総数)		⇒	平成 32 年度	6 箇所(総数)
事業④:	「里沼」ランドナビゲーター育成支援事業					
事業区分:	人材育成		事業期間:	平成 31 年度 ~ 平成 33 年度		
事業費:	平成31年度:	1,500千円	平成32年度:	2,000千円	平成33年度:	1,500千円
事業概要:	既存ガイド団体等と連携しながら、活動者を館林市の魅力を発信し、市内観光を総合的にプロデュースする人材として育成する事業。まず平成31年度でガイド育成講座を実施した上で、平成32年度にランドナビゲーター育成講座、平成33年度にランドナビゲーター活動支援を行う。					
具体的な指標:	ランドナビゲーター活動者数 (*参考 平成30年度観光ガイド会員数 20名)					
目標値:	平成 30 年度	0 名(総数)		⇒	平成 30 年度	30 名(総数)

(6) 日本遺産魅力発信推進事業

事業⑤： 館林市「日本遺産」提案コンペ事業				
事業区分：	人材育成	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 33 年度
事業費：	平成31年度： 2,500千円	平成32年度： 1,500千円	平成33年度：	1,500千円
事業概要：	民間活力やアイデアを取り入れながら、まち全体として市民の活躍の場を創出するための市民参加型提案事業コンペ実施事業。平成31年度＝4件、平成32年度＝2件、平成33年度＝2件を認定し、採用案へ上限500千円を補助し、地域ビジネスの萌芽を育成する。			
具体的な指標：	事業化後の継続数			
目標値：	平成 30 年度	0 件(総数)	⇒	平成 33 年度 8 件(総数)
事業⑥： 館林市「日本遺産」地域プロデューサー活動支援事業				
事業区分：	人材育成	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 33 年度
事業費：	平成31年度： 6,000千円	平成32年度： 3,500千円	平成33年度：	3,500千円
事業概要：	館林市「日本遺産」地域プロデューサーの活動を支援し、情報発信・地域活性化・人材育成・観光・地場産業・歴史文化・地域特色(沼辺)における全7分野の事業展開を促進する。各分野で年間2事業を企画・実施し、市民が気軽に「日本遺産」に参加できる環境を整える。			
具体的な指標：	各事業の事業実施数			
目標値：	平成 30 年度	0 件/年	⇒	平成 33 年度 14 件/年
事業⑦： 館林市まちじゅう「日本遺産」PR事業				
事業区分：	普及啓発	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 36 年度
事業費：	平成31年度： 3,000千円	平成32年度：	平成33年度：	
事業概要：	「館林市まちじゅう『日本遺産』PR大作戦」と称し、市内商店街・大型商業店舗及び民間事業者等への幟・暖簾・ステッカーを設置し「日本遺産」をPRするとともに、地域の一体感を醸成する事業。各媒体にQRコードを貼付し、来訪者の「いいね」や感想等による口コミ効果も狙う。			
具体的な指標：	市内における各種媒体設置数(想定：市内6商店街×5店舗＝30箇所 大型商業施設10店)			
目標値：	平成 30 年度	0 箇所(総数)	⇒	平成 31 年度 40 箇所(総数)
事業⑧： 館林市「日本遺産」ブランド開発事業				
事業区分：	普及啓発	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 33 年度
事業費：	平成31年度： 2,500千円	平成32年度： 1,000千円	平成33年度：	1,000千円
事業概要：	市内各店舗で盛んな新商品開発の波に乗り、「里沼」の歴史文化を扱って館林市「日本遺産」を冠した商品・サービスを開発・提供する。事業者とクリエイターの協働を促進するため委託費(平成31～33年度)50万円や、研究開発費(調査研究・PR印刷費等)などを支援する事業。			
具体的な指標：	館林市「日本遺産」ブランド商品開発・販売数			
目標値：	平成 30 年度	0 件(総数)	⇒	平成 36 年度 30 件(総数)

(6) 日本遺産魅力発信推進事業

事業⑨：産官学連携「SATO-NUMA」事業								
事業区分：		普及啓発		事業期間：	平成 31 年度 ～ 平成 33 年度			
事業費：		平成31年度：	1,500千円	平成32年度：	1,000千円	平成33年度：	1,000千円	
事業概要：		地元高校・短大、包括協定のある東洋大学、まちづくり・観光系学部がある大学(学生・留学生)と連携し、若者・外国人の意見を反映させた新商品・サービスを開発する。かつて「里沼」が人々の交流の中心地であったことにちなみ、次世代のまちづくりや観光を担う人材育成を図る。						
具体的な指標：		新商品開発・販売数						
目標値：		平成 30 年度	0 件(総数) ⇒		平成 33 年度	5 件(総数)		
事業⑩：館林市「日本遺産」戦略的マーケティング調査								
事業区分：		調査研究		事業期間：	平成 31 年度 ～ 平成 32 年度			
事業費：		平成31年度：	4,000千円	平成32年度：	2,000千円	平成33年度：		
事業概要：		館林市を観光する来訪者ニーズや経年的な変動を確認するため、民間委託によりマーケティング調査を実施する。平成31年度＝基本調査、平成32年度＝フォローアップ調査を実施し、地域全体での「もてなしの心」強化、リピーター獲得に向けて適切なフィードバックを行う。						
具体的な指標：		観光入れ込み客数増加率 (※参考：H28年度＝168万人 H29年度＝170万人)						
目標値：		平成 30 年度	未把握 %(増加率) ⇒		平成 32 年度	10 %(増加率)		
事業⑪：うめんべ館林！麦食・川魚食文化PR事業								
事業区分：		普及啓発		事業期間：	平成 31 年度 ～ 平成 33 年度			
事業費：		平成31年度：	1,500千円	平成32年度：	500千円	平成33年度：		500千円
事業概要：		「里沼」の実りを象徴する麦関連食品(うどん・ラーメン・菓子)や川魚食品(鯰・鯉・鮒)のPRを行う(広報宣伝・イベント実施)事業。味をPRするだけでなく、平成23年度から開催している「麺-1グランプリ」や「うどん打ち体験」等のイベントも継続実施、独自食文化PRを図る。						
具体的な指標：		年間での麦食・川魚食文化PRイベント実施回数						
目標値：		平成 30 年度	0 回(年間) ⇒		平成 33 年度	5 回(年間)		
事業⑫：「旧秋元別邸」ガイダンスセンター改修事業								
事業区分：		公開活用のための整備		事業期間：	平成 31 年度 ～ 平成 32 年度			
事業費：		平成31年度：	3,000千円	平成32年度：	5,000千円	平成33年度：		
事業概要：		地形的にも歴史的にも館林城と沼辺の結節点にある歴史的建造物「旧秋元別邸」を館林市「日本遺産」ガイダンスセンターとして位置づけて整備し、展示や観光案内、各種イベントの会場として、館林市の近代化の中で“迎賓館”としての役割を果たしてきた「旧秋元別邸」の再生・活用を行う。(平成31年度＝公開のための展示室整備工事 平成32年度＝バリアフリー設備設置工事)						
具体的な指標：		「旧秋元別邸」での来訪者アンケートによる満足度調査「とても満足」「やや満足」数						
目標値：		平成 30 年度	未把握 % ⇒		平成 36 年度	70 %		

(6) 日本遺産魅力発信推進事業

事業⑬： 田山花袋「一日の行楽」ツアー再現事業				
事業区分：	普及啓発		事業期間：	平成 31 年度 ～ 平成 33 年度
事業費：	平成31年度：	400千円	平成32年度：	400千円
			平成33年度：	400千円
事業概要：	館林出身の明治時代の文豪田山花袋が「一日の行楽」で書いた、館林駅からつつじが岡公園に至るルートを「花袋の『一日の行楽』ツアー」と名付け、定期的に再現ツアーを実施する事業。解説案内だけでなく、渡し舟乗船や特製行楽弁当なども味わい、往時の雰囲気を楽しむツアー。			
具体的な指標：	鉄道・バス会社等による旅行商品数			
目標値：	平成 30 年度	0 件	⇒	平成 33 年度 4 件
事業⑭： 館林市「日本遺産」Webサイト開設事業				
事業区分：	情報発信		事業期間：	平成 31 年度 ～ 平成 33 年度
事業費：	平成31年度：	2,000千円	平成32年度：	300千円
			平成33年度：	300千円
事業概要：	館林市「日本遺産」Webサイトを開設し、ストーリーや構成文化財の諸情報のほか、観光やアクセスマップ及び利便施設などの関連情報を公開し、国内外に向けての積極的なPRを行う事業。単なる開設に留まらず、動画配信や多言語対応化に重点を置くもの。			
具体的な指標：	館林市「日本遺産」Webサイトの閲覧数(ページビュー)			
目標値：	平成 30 年度	未開設 PV(年間)	⇒	平成 33 年度 1,000,000 PV(年間)
事業⑮： 館林市「日本遺産」パンフレット作成・多言語化事業				
事業区分：	情報発信		事業期間：	平成 31 年度 ～ 平成 36 年度
事業費：	平成31年度：	3,000千円	平成32年度：	
			平成33年度：	
事業概要：	平成30年度に市民団体「館林つつじサポーターズ倶楽部」が発行した市内文化財や沼辺マップを総合的に網羅したガイドブックをベースに、館林市「日本遺産」パンフレット発行と多言語化(英語・繁体字)に取り組む。			
具体的な指標：	館林市「日本遺産」ガイドブック・パンフレット(日本語版)の増刷回数			
目標値：	平成 30 年度	0 回	⇒	平成 36 年度 3 回
事業⑯： 館林市「日本遺産」シンポジウム開催事業				
事業区分：	普及啓発		事業期間：	平成 31 年度 ～ 平成 33 年度
事業費：	平成31年度：	1,500千円	平成32年度：	1,000千円
			平成33年度：	1,000千円
事業概要：	近隣認定自治体やストーリーで関連のある自治体と連携して平成31・33年度に「日本遺産」シンポジウム、平成32年度に「沼辺サミット」を開催し、これまでに交流がなかった自治体との協働事業を実施する。			
具体的な指標：	シンポジウム開催時に実施するアンケートによる「日本遺産」認知度調査			
目標値：	平成 30 年度	未実施 %	⇒	平成 36 年度 70 %

（ 7 ） その他事業

事業①：	《文化庁》文化財多言語解説整備事業費補助金				
実施主体：	館林市教育委員会	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 33 年度	
事業概要：	「里沼」文化財の概要を説明するVRコンテンツの制作				
事業②：	《文化庁》文化財保存活用地域計画等を活用した観光拠点づくり事業【情報発信事業】				
実施主体：	館林市・館林市教育委員会	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 33 年度	
事業概要：	文化財を活用した滞在コンテンツを紹介する情報発信ツールの新規作成				
事業③：	《文化庁》文化財保存活用地域計画等を活用した観光拠点づくり事業【普及啓発事業】				
実施主体：	館林市・館林市教育委員会	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 33 年度	
事業概要：	「里沼」モニターツアーの実施と周遊渡船運航の実証実験				
事業④：	《文化庁》文化財保存活用地域計画等を活用した観光拠点づくり事業【活用のための整備に関わる事業】				
実施主体：	館林市・館林市教育委員会	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 33 年度	
事業概要：	「旧秋元別邸」・「旧館林二業見番組合事務所」を活用した観光拠点整備事業				
事業⑤：	《文化庁》歴史生き生き！史跡等総合活用整備事業				
実施主体：	館林市・館林市教育委員会	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 33 年度	
事業概要：	国指定名勝「躑躅ヶ岡」の保存活用整備事業によるバリアフリー促進事業				
事業⑥：	《館林市》館林市文化財保存事業費補助金				
実施主体：	館林市・館林市教育委員会・文化財所有者	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 36 年度	
事業概要：	「里沼」関連の市内指定文化財保存のための補助事業				
事業⑦：	《群馬県》地方創生推進交付金				
実施主体：	館林市	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 36 年度	
事業概要：	悠久の花ハス×水辺利活用による観光創造事業（城沼渡船場改修と観光促進PR事業ほか）				
事業⑧：	《群馬県》群馬県地域振興調整費補助金				
実施主体：	館林市・館林市教育委員会・民間事業者	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 36 年度	
事業概要：	「里沼」の魅力発信事業（イベント）				
事業⑨：	《国土交通省》社会資本整備総合交付金事業				
実施主体：	館林市	事業期間：	平成 32 年度	～ 平成 34 年度	
事業概要：	「旧秋元別邸」周辺整備、地域交流センター整備				
事業⑩：	《館林市》館林市「日本遺産」関連事業支援事業				
実施主体：	民間事業者	事業期間：	平成 31 年度	～ 平成 36 年度	
事業概要：	「日本遺産」に関連した民間事業（イベント開催・商品開発等）支援				

(7) その他事業

事業⑪：	《民間》市民ファンド事業			
実施主体：	館林市「日本遺産」推進協議会	事業期間：	平成 33 年度	～ 平成 36 年度
事業概要：	市民ファンドによる「日本遺産」事業			
事業⑫：	《文化庁》文化遺産総合活用推進事業			
実施主体：	館林市「日本遺産」推進協議会・民間団体	事業期間：	平成 32 年度	～ 平成 34 年度
事業概要：	「里沼」関連の民俗芸能における道具等更新事業			
事業⑬：	《(公財)明治安田クオリティオブライフ文化財団》地域の伝統文化保存維持費用助成(民俗芸能・技術)			
実施主体：	館林市「日本遺産」推進協議会・民間団体	事業期間：	平成 32 年度	～ 平成 35 年度
事業概要：	「里沼」関連の民俗芸能における技能伝承事業			
事業⑭：	《(公財)三菱財団》文化財修復事業助成(※総額2000万(10件程度)国宝・重文以外で展示可能物件が対象)			
実施主体：	館林市教育委員会	事業期間：	平成 32 年度	～ 平成 年度
事業概要：	構成文化財「邑楽躑躅ヶ岡公園之図」展示公開のためのクリーニング事業			
事業⑮：	《(一財)沖永文化振興財団》地域文化活動助成			
実施主体：	民間団体	事業期間：	平成 33 年度	～ 平成 35 年度
事業概要：	「里沼」関連民俗芸能の活動支援事業			
事業⑯：				
実施主体：		事業期間：	平成 年度	～ 平成 年度
事業概要：				
事業⑰：				
実施主体：		事業期間：	平成 年度	～ 平成 年度
事業概要：				
事業⑱：				
実施主体：		事業期間：	平成 年度	～ 平成 年度
事業概要：				
事業⑲：				
実施主体：		事業期間：	平成 年度	～ 平成 年度
事業概要：				
事業⑳：				
実施主体：		事業期間：	平成 年度	～ 平成 年度
事業概要：				